

浜益地域のアイヌ民具資料に関する基礎的検討

—1930年代の研究動向と工芸家山下三五郎の活動—

大坂 拓

目次 はじめに

- 1 浜益のアイヌ民族
 - 2 対象資料について
 - 3 博物館等所蔵資料の組成
 - 4 山下三五郎の工芸品販売活動
- おわりに

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、浜益 (Hamamasu)、小樽 (Otaru)

はじめに

本稿の目的は、収集地として「浜益」という背景情報を伴うアイヌ民具資料を集成し、収集された品目の機能的側面に着目してその特徴を把握することにある。

アイヌ民具については、国外の博物館等に収蔵される資料の所在調査を行った小谷凱宣らが「伝統的な村落生活がいつごろまで維持されていたかという問題は、収集可能であったアイヌ資料の種類と収集場所に深く関連」し、「古くから日本人、日本文化と接触していた北海道南部の沿岸地域では、文化変容は極度に進み、住民の交代という現象も早くからみられた」（小谷ほか 1993：21）との見通しを示したように、地理的条件による差異、年代学的な変化が博物館収蔵資料の組成に反映されていることが予想されているが、そこには当然のことながら、収集する／される側の意図を含む多様な要因も介在している（齋藤 1994：140-141；小杉 1997：410；出利葉 1997：57；小谷 2004：13）。

今後、物質文化に基づいてアイヌ文化の変容過程を具体的に明らかにしていくためには、小杉康がクリルアイヌを対象として実践したように（小杉 1997）、それぞれの地域で収集された資料を可能な限り網羅的に集成して年代学的な変化を射程に収めた組成論検討をおこなうとともに、資料収集の背景について考察を加え、広域に及ぶ相互比較に向けた基礎をひとつひとつ構築していく必要があるだろう。

本稿では以上のような問題意識のもと、一つの事例として、19世紀の段階で極めて激しい人口減少を経験し

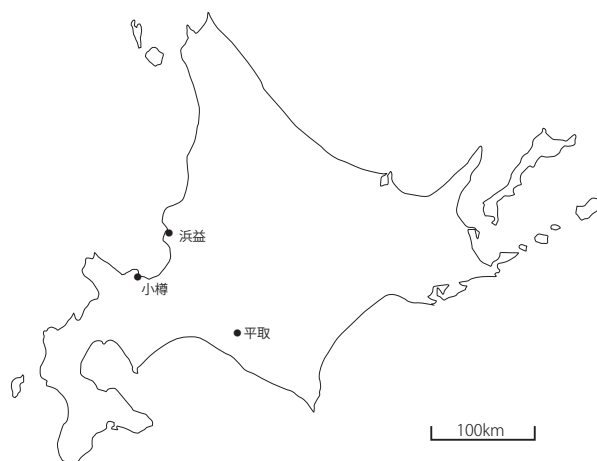


図1 本稿関連地図

たため民族誌的な記述が乏しいとされる旧「西蝦夷地」から浜益を取り上げることとした。

結論の一部を先に述べることになるが、「浜益」という背景情報を伴うアイヌ民具資料は、そのほとんどが1930年代に活動した工芸家、山下三五郎が製作した祭祀具で占められる点で極めて特徴的である。美術工芸史家の杉山壽榮男の記述などによれば、山下は1882（明治15）年に現在の石狩市浜益区浜益の漁家に生まれ、平取町で林業に従事したのち、『北の工芸』（杉山 1934）刊行当時には札幌市内で工芸品の製作販売をなりわいとしていた人物で、1930～40年代には名取武光の「アイヌの矢毒『アイコルチェップ』」（名取 1939）、「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」（名取 1941）などに多くの民族誌的情報を提供していることも知られ

ている。個々の資料の背景情報に関わる事実の確定とともに、この一人の工芸家が製作した祭祀具が収集された民具資料の大部分を占めるに至った背景に関する考察が、本稿の主題となる。

以下では、第一に明治～昭和期の浜益のアイヌ民族の生活を概観し、第二に、背景情報に吟味を加えつつ、博物館等に所蔵される浜益収集であることが明確な資料、背景情報を欠くものの浜益収集の可能性のある資料を集成する。続いて第三に、博物館等に収集された資料の組成について機能的側面に着目した解釈を示し、第四に、文献によって明らかになる山下の活動を辿り、収集された資料との「ズレ」を指摘し、最後にまとめをおこなう。

1 浜益のアイヌ民族

浜益のアイヌ民族は、1822（文政5）年に297人の居住が記録されているが（高倉 1972：295）、明治初期の1873（明治6）年には44戸176人（男性79人、女性97人）にまで減少していた（大蔵省 1885：567）。1886（明治19）年には小樽市高島からの転入者が加わっており、その中には後年、旭川市近文での「旧土人保護地」移転問題に加わったことで著名な天川恵三郎もいた（貝澤 1979：9；小川 1997：66）⁽¹⁾。

1900（明治33）年頃の状況については河野常吉らによる『北海道殖民状況報文』の記載がある。当時の浜益は和人漁業者の流入が続いて総戸数982戸、人口6,029人に達しており、アイヌ民族は圧倒的な少数者となっていた。『アイヌ』ハ皆僅少ノ給料ニテ漁場ノ雇ヲナシ、其他雑漁拾ヒ昆布等ヲ為シ、冬期ハ獣猟ヲ為スモノアリト雖モ究困ノ状甚シキモノアリ（河野他編 1987：160）という記述からは、単に少数者となっただけではなく、経済的にも極めて苦しい状況に置かれる人々が出ていたことが伺われる。

アイヌ民族の困窮が全道的に社会問題化する中で、農業への転換を政策によって推し進めようとする「北海道旧土人保護法」が制定されると、浜益では天川を中心とするアイヌ民族46人が弁護士朝山益雄を代理人として給与地出願手続きをおこない（谷本 2006：727）、1901年2月に下付を受けることになるが、実際に下付された給与地は「山が大半」（貝澤 1979：395）という著しい傾斜地に地形を度外視した直線区画をなしたもので、耕作困難な区画が多数含まれていたため、後に問題化した（小川・山田編 1998：602；山田 2011：290）。1936年

8月に山下を伴って当地を訪問した杉山は、以前は海岸部に漁業に従事していたが、「内地人が多く入ってきて海岸地帯に居住する様になつてから、この尾札内の部落に移住させられた」（杉山 1938：35）という言葉を紹介しており、漁業から農業へと生業の転換を余儀なくされた経緯に対する、当事者の認識の一例を知ることができる。

民族学的な調査は、1930年代に札幌に居住して多数の研究者と接触があった山下に対するものを除けば極めて少なく、わずかに1935年のアイヌ文学研究者久保寺逸彦、1959年10月13日の郷土史家更科源蔵によるものが知られるにとどまる。

このうち久保寺の調査は、沙流川流域で聞き取った英雄叙事詩の舞台となった土地を浜益と考え、現地を踏査したものという点でやや特殊性性格を帯びていた（久保寺 2004：131）。調査に同行した沖縄研究者の金城朝永は浜益で目にしたアイヌ民族の現状について、「和人と全く区別がつかぬ風態」（古原 2001：206）といった記述を繰り返しており、アイヌ民族の女性が日蓮宗の作法で葬儀に立つ様子を目にする、「このあたりのアイヌが既に旧習を捨てたるはこの一例にて知るべし（但し、サ、葺きの家は散見）」（古原 2001：208）とし、「最早土地の人はアイヌに就きては知る所なく」、「これ以上ここに滞在する必要は更に無き」（古原 2001：210）とまで記している。

ただし、この調査から四半世紀後に浜益を訪れた更科は、久保寺らが聞き取りを行った人物の子から黄金山が祈りの対象となっていたことや魚類のアイヌ語名称など数多くの情報を聞き取っており⁽²⁾、上記の金城の記述を額面通りに受け取ることは難しい。むしろ、久保寺らが接触した人々も少なくない民族誌的な知識を有していたもののそれを語ることを好まなかったといった、異なる要因が存在した可能性が高いだろう。

2 対象資料について

対象資料の選定にあたっては、博物館等が刊行している目録、展示会図録等から「浜益」「濱増毛」等の記載がある資料を抽出するとともに、複数の機関に対して該当する資料の有無を照会した結果をとりまとめ、さらに形態の類似等を基準にして関係する可能性がある資料を追加して調査対象リストを整えた。その後、調査対象リスト掲載の全資料について、各収蔵機関で実地調査を実

(1) 高島から浜益への移住の規模や経緯などは十分明らかになっていない（小川 1997：66）。他に定住に至らなかったものの一時的に浜益に居住したアイヌ民族として、石狩川河口の茨戸に生まれた能登西雄がいる。能登は1905（明治38）年に樺太に渡り漁業に従事、1910（明治43）年に樺太の名寄に入植した後、1921（大正10）年に北海道に戻り、江別を経て浜益に一時的に居住したことを語っている（高倉 1935）。能登の母は小樽出身で天川の縁戚にあたるといい、こうしたネットワークの存在が移住先の選択に影響していた可能性がある。

(2) 弟子屈町図書館が所蔵する更科のフィールドノート『コタン探訪帖』（No12：48-49）の記載による

施して観察ノート及び写真記録を作成した。

調査の過程で、資料に記載された情報や関連文献の対照によって、目録では欠落していた背景情報が補われる場合があったため、資料本体への記載は可能な限り「背景情報に関わる資料本体の記載」として転記し、写真資料や文献の記載によって背景情報を補うことができるものは備考欄にその旨を記載した上で、補った情報を [] 内に入れて記した。最終的な対象資料は、明確な背景情報を伴うもの82点、関係する可能性が高いもの12点の計94点となった(表1)。

(1) 北大植物園・博物館所蔵資料

2008年に刊行された『アイヌ民族資料目録』(北大植物園・博物館 2008)、及び墓標に関する資料情報修正(加藤・高谷 2018)の成果を参照すると、収集地が浜益とされている資料は46点が収蔵されており、うち45点が山下三五郎の製作品で、残る1点も山下が製作した可能性が高いものである。なお、『目録』の編纂にあたっては、氏名や収集地の一部が補われている部分があり、それについては『目録』を踏襲して [] 内に入れて示すこととした。

祭壇

『目録』では1点が収蔵されていることが知られている。今回の調査では、最近になって所在が確認されたガラス乾板写真(図2)を用いてその他の資料との対応関係を確認した。なお、この写真は『アイヌ民族誌』(アイヌ文化保存対策協議会 1969: 574)に「塘路アイヌ」というキャプションが付されて掲載されているが、1941年に発表された「沙流アイヌの熊送りにおける神々の由来とヌサ」では「増毛」(名取 1941: 第十四図)、1974年の著作集への再録時には「第十四図 浜益毛のヌササン(山下三五郎氏・北大博物館所蔵)」とされている。写真中央付近に写る大型の木幣の中には、現在、「イオマンテ 山下三五郎」という記載がある荷札が付属しているものが複数含まれることから、『アイヌ民族誌』の記述は誤りと判断することができる。

写真の祭壇で中心をなすのは、現在資料番号10188として登録されている一群の木幣(図3: 1)で、その他に、祭壇向かって右に立つ人物⁽³⁾の前に立てられた木幣2点、祭壇前に立てられた木幣4点が収蔵資料と一致することが確認されたことから(図3: 2~7)、一括して扱うこととした。また、祭壇に宝物を飾り付けるための串(図4: 破線範囲)も、形状や削りかけの位置から収蔵資料

と一致することが確認されたため(図5)、同様に祭壇と一括して扱った⁽⁴⁾。

もっとも、写真に写る全ての資料が山下に関連するものと考えられるわけではない。祭壇の横に立つ人物が着用している衣服は現在、資料番号27として収蔵されているが、同じ衣服を他の人物が着用している写真も存在することから(名取 1941: 66 第十八図A)、山下が持参したものではなく、当時の北大植物園・博物館の収蔵品ないし職員が収集していたものを撮影の際に貸し出したものと見られる。

祭壇に飾り付けられた宝物には現在の収蔵資料と同等可能なものが6点含まれ、うち4点には背景情報が伴っており(表1)、1883年に千歳で収集されたという情報を伴う矢筒(図6: 2)が最も収集年代が古い⁽⁵⁾。資料の中に収集年代が1880年代に遡るものが含まれていることから、これらも着衣と同様に、儀礼の再現のために当時の収蔵資料等が使用されたものと判断できる。太刀2点のうち1点(図6: 1)は、柄裏に1933年7月7日に今井から購入という紙ラベルが残っており、山下からの購入品ではないことを裏付ける。

墓標模型

4点が収蔵されており(図7)、背景情報の訂正が加えられていることから(加藤・高谷 2018)、その成果に従った。いずれも名取が「之等は或浜益のアイヌが造って筆者に寄贈してくれたのであるが、型式は兎も角、ウトキアツの巻き方や黒白の布の用ひ方等細かい点に至っては、手を抜いてあるから、詳細の記載は省く」(名取 1972: 84)としたものに該当するものとみられ、墓標の形態を示すために製作された模型と考えて良いだろう。

木幣

祭壇と組み合うものを除外すると現在の収蔵点数は10点となる(図8)。北大植物園・博物館「物品監守証書」(加藤 2008: 表11)には、1936年に山下三五郎から木幣10点が購入された記録があるが、現在確認されている資料のうち3点には収蔵年として1934年の情報が付属しており一致しない。1934年に購入したものを1936年に清算するなどの過程が介在した場合や、その他にも資料の出入りがあった結果、偶然に資料点数が一致した可能性など複数の理由が考えられるが、現状では情報が不足しており、踏み込んだ解釈を加えることは控える。

(3) おそらく山下本人と考えられる。山下であることが明記された写真としては、『アイヌの叫び』(荒井 1984)巻頭に掲載されたものがある。

(4) 『目録』では木幣、有翼酒簪として登録されていた。

(5) 図2の写真が撮影された段階から現在までの間に、表面に付されていた剥幣や鏤等が脱落したことが見て取れる。



図2 山下三五郎製作の熊送り儀礼用祭壇



1 (10188)



2 (11221)

3 (11226)

4 (11219)

5 (11220)

6 (10197)

7 (10198)

図3 祭壇を構成する木幣類 (全て北大植物園・博物館)

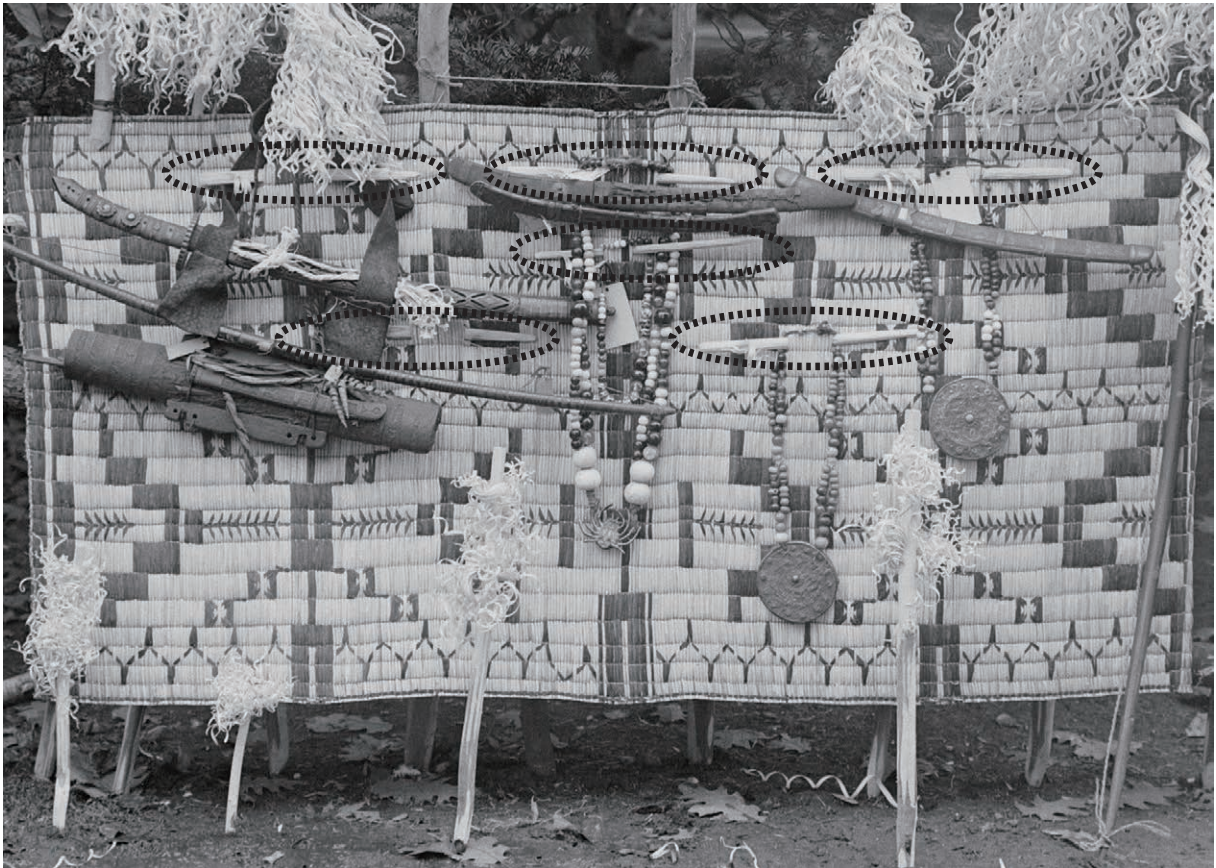


図4 祭壇部分拡大

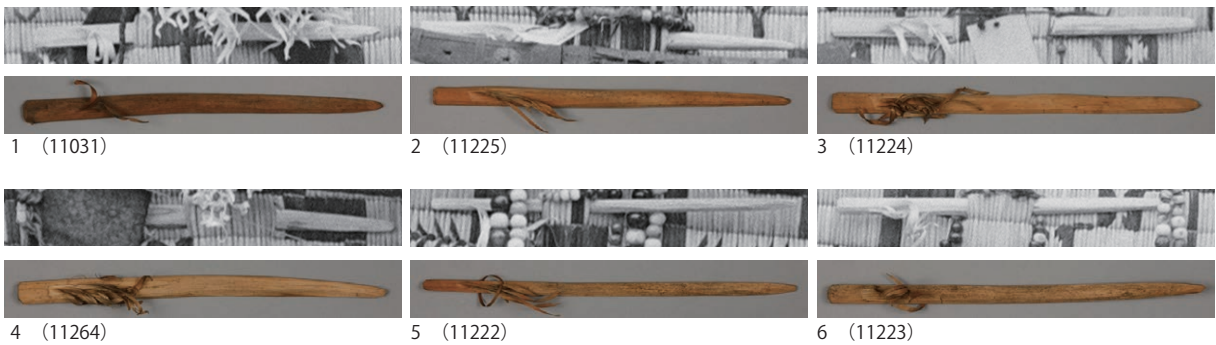


図5 宝物類固定に使用する串の同定 (全て北大植物園・博物館)



図6 祭壇に飾り付けられた宝物類 (全て北大植物園・博物館)

表1 祭壇関連資料の背景情報

番号	資料番号	資料名	収集年	収集地等	備考
1	9475	首飾り	1936年	北海道	今井呉服店
2	9651	首飾り	1914年	沙流	
3	9642	矢筒	1883年	千歳	
4	11053	太刀	[1933年]		[今井呉服店]
5	11054	腰刀			
6	11094	腰刀			



図7 墓標模型



図8 祭壇以外の木幣類 (全て北大植物園・博物館)

箸・串類

8件18点が収蔵されている(図9:1~4、6~9)。ほぼ同様の特徴を示す『目録』で「イナウ」とされている資料(図9:1~4)の中に、「カムイバスイ ゴハンアゲルトキゴハンノ上へアゲルハシ」と書かれた紙片が巻き付けられている資料(図9:1)が確認された。「カムイバスイ」はkamuy pasuy「熊神-箸」を意味するものと見られ、形状の特徴からも熊送り儀礼の際に使用する熊神用箸、ないし串と見られるため名称を訂正した。

残る4点のうち3点(図9:6~8)は、北大植物園・博

物館元職員の難波琢雄が作成した写真アルバムに「浜益」「山下三五郎」とする記入があるものの、同アルバムには旭川市博物館に所蔵される類似資料(図9:10)の写真が並べて貼付されており、難波による情報そのものが類似性をもとにした推測である可能性も否定できないことから、参考として提示するに留める。削りかけなどの加工が見られないものの、素材や法量が一致する資料(図9:9)とともに詳細な用途は不明だが、熊送り儀礼の際に同様の木製品を串として使用するほか、狢運を占う籤として使用する例があることから⁽⁶⁾、ここでは

(6) 狢運を占うものとしての使用する製品については北原次郎太氏からご教示を受けた。記して感謝申し上げる。



1 (北大植物園・博物館 10819)



2 (北大植物園・博物館 10820)



3 (北大植物園・博物館 10821)



4 (北大植物園・博物館 10822)



5 (旭川市博物館 上から 4055・4054・4058・4057)



6 (北大植物園・博物館 33745)



7 (北大植物園・博物館 33746)



8 (北大植物園・博物館 33747)



9 (北大植物園・博物館 33748)



10 (旭川市博物館 上から 4060・4062・4061)

図9 儀礼用箸及び串

仮に串とした。

有翼酒箸

1931～1949年にかけて北大植物園・博物館に勤務していた名取武光の著作『アイヌの花矢と有翼酒箸』(名取 1985)に掲載された資料との対照をおこない、対応関係を備考欄に記した。

名取が浜益収集資料として示しているのは模式図5例

(名取 1985: 第34表5、第35表6～9)で、現在確認されている点数6点よりも1点少ないが、名取は分析にあたり、共通する特徴をもつ資料をまとめる処理をしているため⁽⁷⁾、浜益収集資料のうち刻印がほぼ共通する2点(図10: 4、5)がまとめられ、数値のズレが生じた可能性がある。

『目録』で入手先として「山下家 天川家」と併記されている資料(図10: 2)は、両家に共通するものとし

(7)「資料総数は135本であるが、同型式のものが含まれているので、研究の対象としては129本である」(名取 1985: 137-138)の記述による。なお、多くの資料の刻印には黒色の塗料が塗布されており、解像度の低い写真や印刷物でも刻印の判別を容易にするために意図的になされたものとみられるが、図10-4にはこの処理が行われていないため、この資料が計数から除外されたものであった可能性も考えられる。

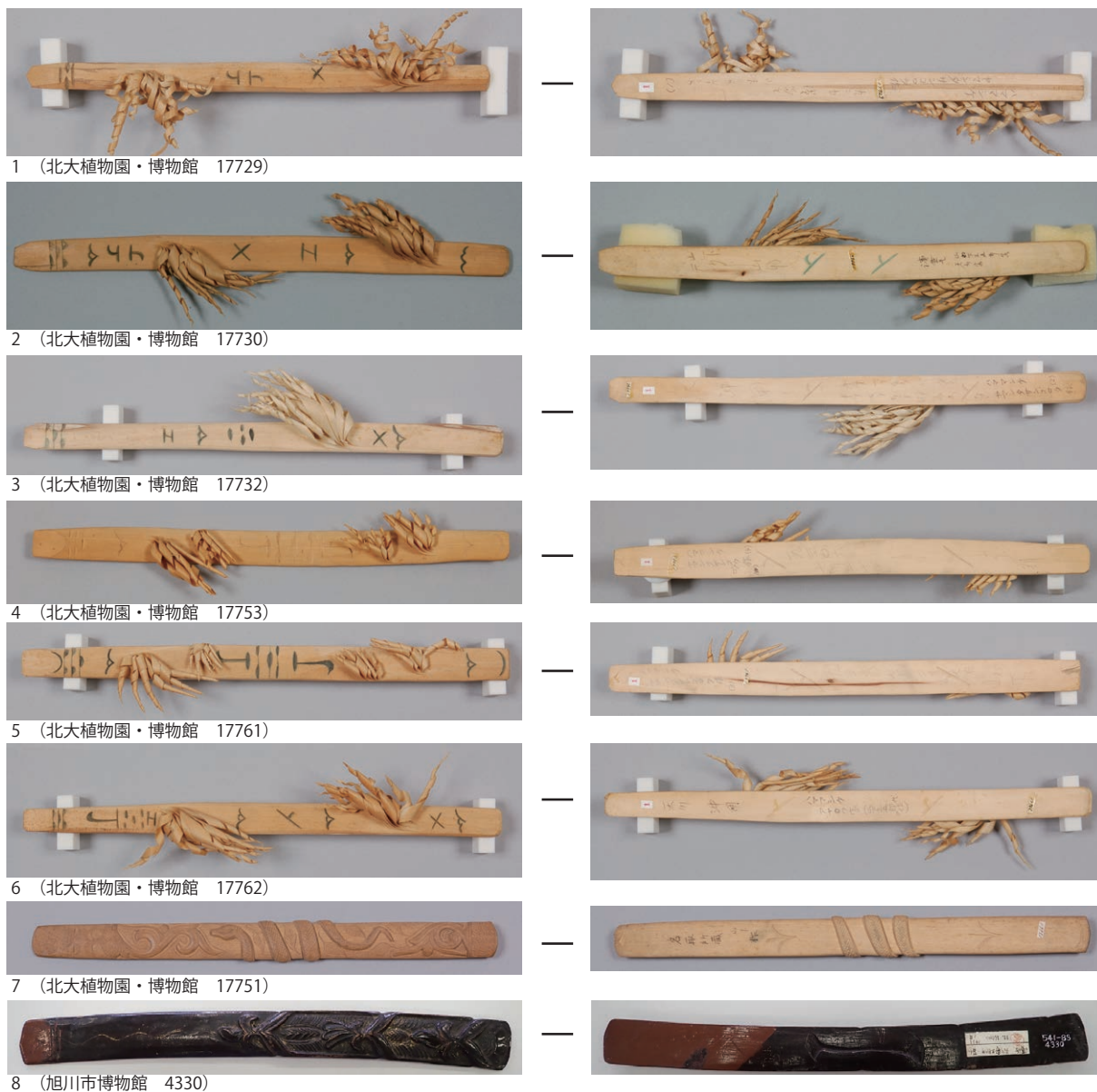


図10 有翼酒箸及び捧酒箸



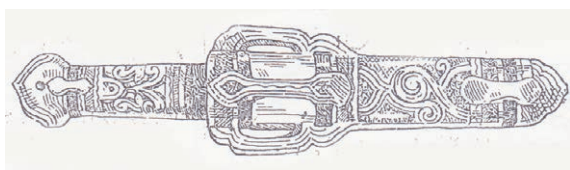
図11 花矢



1a (土佐林 1948b)



1b (早稲田大学 523)



2a (土佐林 1948a)



2b (早稲田大学 526)

図12 土佐林が山下三五郎作とした山刀

て製作されたもののようにも思われるが、同資料に記入された「山下 天川 山用」の文字と酷似した筆跡で「天川 沖用」と記入された資料(図10:6)には、「ハママシケ アマカワ家 山下三五郎代作」と記入されている。名取は図10:2の刻印を「アマカワ家」として図示していることとあわせて考えれば(名取 1985: 第35表)、代作者を示す「山下」、本来の使用者と用途を示す「天川 山用」が併記されていたものが、後に混乱が生じ、「山下三五郎家 天川家」と記入された可能性が高いだろう。

捧酒箸

「山下作」と記入されたものの1点が所蔵されている(図10:7)。使用痕などは全く観察されない。

花矢

名取の著作中で、浜益のものとして山下が1932年に製作したものが11点収集されたことが確認できる(名取 1985: 38)。本文中では資料の内訳が「完矢1・鏃10」とされているが、写真図版では鏃9点が図示されており、後者の数値が現在、北大植物園・博物館に所蔵される矢2点、鏃9点、計11点(図11)と一致する。各資



料の文様は、細部の特徴に至るまで名取が提示した図版と一致していることから、資料と文献図版等との対応関係を備考欄に記した。

(2) 北海道博物館所蔵資料

河野広道寄贈資料中に、「浜益」の情報が伴う木幣1点、捧酒箸2点が含まれている。そのうち木幣1点は山下の製作で、捧酒箸1点は天川恵三郎から河野が譲り受けた旨の記載がある。

(3) 旭川市博物館所蔵資料

『旭川市博物館所蔵品目録』XVI(旭川市博物館 2006)および同XVIII(旭川市博物館 2008)に、河野広道らが収集した資料として「浜益」ないし「浜益実田」の背景情報を伴う資料17点が掲載されており、うち製作者の情報が伴うものは天川恵三郎によるもの2点、山下三五郎によるもの10点、計12点となっている。

木幣

5点が収蔵されている。収集地が「浜益実田」とされる3点(表2: 54-56)のうち1点のみ製作者の情報が欠如しているが、他2点と連番の注記がなされていること、



1 「マキリ」

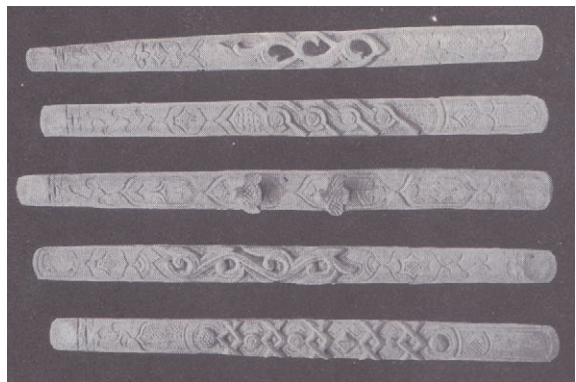


2 「マキリ」

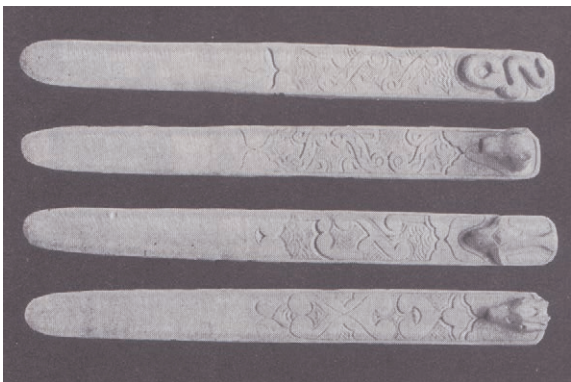
図13 北海道原始文化展覧会（1933年）「展覧会記念製品」（1）



図14 「山下」の刻印がある小刀鞘（早稲田大学所蔵 508）



1 「髭篋」



2 「紙切」

図15 北海道原始文化展覧会（1933年）「展覧会記念製品」（2）



1 （早稲田大学 204）



2 （市立函館博物館 700574）



3 （旭川市博物館 4271）



図16 山下三五郎製作の可能性がある捧酒箸及びペーパーナイフ

形態の類似性が極めて高いことから見て、同じく天川が製作したものである可能性が高い。

目録で製作者の情報が欠如していたもののうち1点(表2:58)は、資料本体の記載から確認されたため情報を補った。

箸・串類

目録で木幣と分類されている資料のうち4点(図9:5)は、全長19.6~19.9cmで、北大植物園・博物館に所蔵される類似資料に「カムイバスイ」と記載した紙が付属していることから、熊送り儀礼の際に熊神に供える箸ないし串と判断した。うち1点(表2:62)のみ製作者の情報が欠如しているが、資料の特徴と記載内容がほぼ他3点と共通していることから、これも山下が製作した可能性が高い。

「イヌベシュ」の名称で登録されている3点(図9:10)は、最大長12.2cm、最小9.7cmで、先端部の刻みの数に違いがある。詳細な用途は不明であるが、ここでは北大植物園・博物館所蔵の類品と同様に、熊送り儀礼の際に使用する串の一種である可能性を考えておきたい。

有翼酒箸・捧酒箸

有翼酒箸は3点が収蔵されており、うち1点のみに山下三五郎と記載されている。他2点も山下が製作したものと類似しており、同一作者のものである可能性が考えられる。

捧酒箸とされるものは2点が収蔵されており、1点は天川が寄贈したものである(図10:8)。残る1点は、先端部に刻印や「舌」等と呼称される刻み目が欠如している点でその他の浜益収集事例と異なる(図16:3)。山下が関わった「北海道原始文化展覧会」(1933年開催)には、よく類似したものが「紙切」として出品された事例が紹介されていることから(図15:2)、本資料もペーパーナイフとして製作されたものと判断し、資料名を改めた。

(4) アイヌ民族文化財団所蔵資料

アイヌ民族文化財団所蔵資料のうち、旧アイヌ民族博物館が刊行した『児玉資料目録Ⅱ』(アイヌ民族博物館1991)に「浜益村天恵」ないし「浜益」の背景情報を伴う有翼酒箸2点、花矢及び花矢の鏃10点が含まれているほか、製作者の情報が欠落している花矢1点(表2:76)について、本体に「山下三五郎1」と記載されることが確認されたため表に情報を追加した。13点全

点が山下の製作による。

その他、花矢の鏃4点(表2:84~87)は背景情報が付属していないが、上記の花矢と連番が付与されていること、資料の特徴も極めて類似していることから、同一作者による可能性が高いものとして表に含めた。

(5) 早稲田大学會津八一記念博物館所蔵資料

アイヌ民具の蒐集家として知られた土佐林義雄のコレクションが収蔵されており、背景情報は全て失われているものの、土佐林が雑誌『北方民藝』に連載した「北の民藝」の中で山下の製作品として2点のスケッチが掲載されていることから(土佐林1948a:6、土佐林1948b:6)、これをもとに背景情報を復元して対象資料に加えた⁽⁸⁾。

土佐林によれば、2点はいずれも「タシロ」で、1点(図12:1)は柄、鞘ともに二枚の朴材の板を貼り合わせたもので、樹皮で固定されていない、鞘は呑口にならず刀身に合わせているなど、アイヌ民具資料として知られている多くの小刀、山刀の製作技法と異なっている。この点は、土佐林自身が「素材を指物師に作らせ」たことを明らかにしており(土佐林1948b:6)、和人の職人が本体を製作し、山下はそれに彫刻のみを施したことに由来することが知られる。

外形がほぼ共通したもう1点(図12:2)は柄、鞘ともに削り抜きのものにサクラの樹皮を巻いて補強したもので、鞘は呑口になり、柄の金属部分が収まる。こちらが山下による本来の製作技術を示すものと見て良いだろう。

なお、土佐林は同連載中で他にも「数点」の山下の作品を所有しているとしており、早稲田大学が所蔵しているもののうち、「山下」の刻印がある小刀鞘(図14)や、山下が製作したことが確実な有翼酒箸と共通する刻印が多数刻まれた捧酒箸(図16:1)、文様が類似したタシロ(表2:92)、根付(表2:89)が該当してくる可能性があることから、参考として表に加えた。

(6) 国立民族学博物館所蔵資料

かんじきとして登録されている資料について、太田雄治が「石狩アイヌ山下三五郎氏製作のもの」として図示し、「アチック・ミュージアムに贈られた」(太田1933:27)としているものと同一の可能性が高いため表に加えた。

太田の挿図には「イタヤ材」と記載されているが、肉眼観察ではクルミに類似している。クルミはイタヤカエ

(8) この文献の存在は、北海道大学アイヌ先住民センター山崎幸治准教授が2016年7月26日に行った講演によって知った。その後、文献の詳細についてご教示いただいた山崎氏、入手に協力いただいた当館亀丸由紀子学芸員に感謝申し上げる。

表2 浜益収集及び関連資料一覧 (1)

番号	収蔵機関	資料番号	資料名	収集年	収集地等	収集先等	収集者	
1	北大植物園・博物館	172	墓標模型		浜益	山下三五郎力	名取武光力	
2		173	墓標模型		浜益	山下三五郎	名取武光	
3		174	墓標模型		浜益	山下三五郎	名取武光	
4		175	墓標模型		浜益	山下三五郎	名取武光	
5		10188	祭壇			浜益浜増毛	山下三五郎	犬飼哲夫
		10197						
		10198						
		11219						
		11220						
		11221						
		11031						
		11222						
		11223						
		11224						
		11225						
		11264						
6		10194	木幣	1934年	浜益浜増毛	山下家	名取武光	
7		10718	木幣	1934年	浜益浜増毛	山下三五郎	名取武光	
8		10720	木幣		〔浜益浜増毛〕	山下三五郎	名取武光	
9		10721	木幣		〔浜益浜増毛〕	山下三五郎	名取武光	
10		10722	木幣		〔浜益浜増毛〕	山下三五郎	名取武光	
11		10723	木幣		〔浜益浜増毛〕	山下三五郎	名取武光	
12		10724	木幣		〔浜益浜増毛〕	山下三五郎	名取武光	
13		10725	木幣	1934年	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎	名取武光	
14		10719	木幣		〔浜益浜増毛〕	山下三五郎	名取武光	
15		34622	木幣		浜益浜増毛	山下三五郎		
16		34623	木幣		浜益浜増毛	山下三五郎		
17		17729	有翼酒箸	1935年	浜益浜増毛	山下三五郎家		
18		17730	有翼酒箸		浜益浜増毛	天川〔恵三郎〕山下〔三五郎〕		
19		17732	有翼酒箸		浜益浜増毛	山下三五郎		
20		17753	有翼酒箸	1936年	浜益浜増毛	山下三五郎		
21		17761	有翼酒箸	1936年	〔浜益〕浜増毛	山下三五郎		
22		17762	有翼酒箸		〔浜益〕浜増毛	山下三五郎		
23		23867	花矢（鐵）	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
24		23868	花矢（鐵）	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
25		23869	花矢（鐵）	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
26		23870	花矢（鐵）	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
27		23871	花矢（鐵）	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
28		23872	花矢（鐵）	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
29		23873	花矢（鐵）	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
30		23874	花矢（鐵）	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
31		23875	花矢（鐵）	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
32		23882	花矢	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
33		23883	花矢	[1932年]	〔浜益浜増毛〕	山下三五郎		
34		10819	箸		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
35		10820-1	箸		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
		10820-2						
36		10821-1	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
37		10821-2	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
38		10821-3	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
39		10821-4	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
40		10821-5	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
41		10821-6	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
42		10821-7	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
43		10822-1	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
44		10822-2	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
45		10822-3	串		浜益〔浜増毛〕	山下三五郎		
46		33745	串					
47		33746	串					
48		33747	串					
49		33748	串					
50		17751	捧酒箸			浜益浜増毛	山下〔三五郎〕	

背景情報に関わる資料本体の記載	備考
	名取「アイヌ土俗品解説」の浜益の「エフンダニクワ」に比定
「エムシクワ 濱益毛 山下三五郎作（名取）」の記載	
「オップクワ 濱益毛 山下三五郎作（名取）」の記載	
「プタウシクワ 濱益毛 アイヌ 山下三五郎作」の記載	
「イオマンテ 山下三五郎」の荷札	有翼酒簀付属、北大植物園で実施したイオマンテの再現に伴って収集と推定
	写真資料80071で祭壇10188と組み合わせることを確認
	写真資料80071で祭壇10189と組み合わせることを確認
	写真資料80071で祭壇10188と組み合わせることを確認
	写真資料80071で祭壇10188と組み合わせることを確認
	写真資料80071で祭壇10188と組み合わせることを確認
	写真資料80071に映る留串6本中の1本、『目録』上は「イナウ」
	写真資料80071に映る留串6本中の1本、『目録』上は「捧酒簀、キケウ _レ パスイ」
	写真資料80071に映る留串6本中の1本、『目録』上は「捧酒簀、キケウ _レ パスイ」
	写真資料80071に映る留串6本中の1本、『目録』上は「捧酒簀、キケウ _レ パスイ」
	写真資料80071に映る留串6本中の1本、『目録』上は「捧酒簀、キケウ _レ パスイ」
	写真資料80071に映る留串6本中の1本、『目録』上は「捧酒簀、キケウ _レ パスイ」
「ハシナウ 一九三四 浜益毛 山下家（名取）」のペン書	形状は沙流川流域のものに類似する
「コタンクルチカップ 山下」のペン書	
「ヌサコロカムイ ワッカウシカムイイナウ 山下」のペン書	
「山下」のペン書	難波アルバムによれば「Abe-huci-kamuy-inaw」
「キムンカムイイナウ ベケレイナウ＝キケバルセイナウ」のペン書	有翼酒簀付属
「山下 舟ノ先ニ下ゲル」のペン書	
「ソッキコロカムイイナウ 其他 山下」のペン書	
「一九三四 山下三五郎作 日高のチセコロカムイイナウ 男桜を用ふ。別にオップを添える（名取蔵）」のペン書	沙流川流域の形状を模作したもの。羽根はついているが、「心臓」が無い。槍は欠。
	『目録』上は「木幣」、難波アルバムによれば10725に付属の槍
「浜益 山下三五郎」のペン書	
「浜益 山下三五郎」のペン書	
「ハママシケ ヤマシタサングロウ作」の鉛筆書、「浜益毛 山下三五郎家（1）」のペン書	名取1985：第35表8「サングロウ家」に対応
「山下 天川 山用」、「浜益毛 山下三五郎家 天川家」のペン書	名取1985：第35表7「アマカワ家」に対応
「山下 沖用」、「キケ一つなら印ある キケ二つなら印あらない」、「ハママシケ ヤマシタサングロウ作（2）」のペン書	名取1985：第35表9「サングロウ家」に対応
「ハママシケ ヤマシタサングロウ作（4）」、「一九三六 七月二七日」、「山下作」の鉛筆書	名取1985：第34表5「サングロウ家」か、刻印一部相違
「ハママシケ ヤマシタサングロウ作（3）」、「一九三六 七月二七日 山下」の鉛筆書	名取1985：第34表5「サングロウ家」か、刻印一部相違
「天川 沖用」、「ハママシケ アマカワ家 山下三五郎代作」のペン書	名取1985：第35表6「アマカワ家」か、刻印一部相違
「増毛 山下三五郎（1）」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図6「ウォッキキリアイ」、写真図版中列中段に対応
「増毛 山下三五郎（2）」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図5「ウォッキキリアイ」、写真図版中列下段に対応
「増毛（3）山下三五郎」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図7「ウォッキキリアイ」、写真図版右列上段に対応
「増毛 山下三五郎（4）」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図9「チテムリリアイ」、写真図版中列上段に対応
「増毛 山下三五郎（5）」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図4「タリベノカアイ・カモメ文の矢」、写真図版左列中段に対応
「増毛（6）山下三五郎」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図8「チトクバアイ」、写真図版左列上段に対応
「増毛 山下三五郎（7）」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図3「レブンカムイアイまたはアシュベノカアイ」、写真図版右列下段に対応
「増毛（8）山下三五郎」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図11「ブクサムリリアイ」、写真図版右列中段に対応
「増毛（9）山下三五郎」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図10「ウタサムリリアイ」、写真図版左列下段に対応
「増毛（10）山下三五郎」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図1「キムンカムイアイまたはイルウェノカアイ」に対応、写真図版無し
「増毛（7）山下三五郎」と記載の紙片貼付	名取1985：第20図2「レブンカムイアイまたはアシュベノカアイ」に対応、写真図版無し
「10819 10819 カムイパスイ ゴハンアゲルトキゴハンノ上ヘアゲルハシ」と記載の紙片付属	2本組
「1」の鉛筆書	枝番は資料本体の鉛筆書による、『目録』上は「イナウ」、10820-2と2本1組と推定
「2」の鉛筆書	枝番は資料本体の鉛筆書による、『目録』上は「イナウ」、10820-1と2本1組と推定
「1」の鉛筆書	枝番は資料本体の鉛筆書による、『目録』上は「イナウ」
「2」の鉛筆書	枝番は資料本体の鉛筆書による、『目録』上は「イナウ」
「3」の鉛筆書	枝番は資料本体の鉛筆書による、『目録』上は「イナウ」
「4」の鉛筆書	枝番は資料本体の鉛筆書による、『目録』上は「イナウ」
「5」の鉛筆書	枝番は資料本体の鉛筆書による、『目録』上は「イナウ」
「6」の鉛筆書	枝番は資料本体の鉛筆書による、『目録』上は「イナウ」
「7」の鉛筆書	枝番は資料本体の鉛筆書による、『目録』上は「イナウ」
	枝番は本稿の記述の便宜のために附与、『目録』上は「イナウ」
	枝番は本稿の記述の便宜のために附与、『目録』上は「イナウ」
	枝番は本稿の記述の便宜のために附与、『目録』上は「イナウ」
	『目録』上は「イナウ」、難波アルバムによれば「浜益 山下三五郎作」
	『目録』上は「イナウ」、難波アルバムによれば「浜益 山下三五郎作」
	『目録』上は「イナウ」、難波アルバムによれば「浜益 山下三五郎作」
	『目録』上は「イナウ？棒」、形状から浜益のものと推定
「名取所蔵 山下作」のペン書	

表2 浜益収集及び関連資料一覧 (2)

番号	収蔵機関	資料番号	資料名	収集年	収集地等	収集先等	収集者
51	北海道博物館	8151	木幣		浜益	山下三五郎	河野広道
52		8021	捧酒箸		浜益		河野広道
53		8022	捧酒箸	1932年	浜益	天川恵三郎	河野広道
54	旭川市博物館	4005	木幣	1931年	浜益実田	天川恵三郎	河野広道
55		4008	木幣	1931年	浜益実田	天川恵三郎	河野広道
56		4018	木幣	1931年	浜益実田		河野広道
57		4052	木幣		浜益	山下三五郎	河野広道
58		4073	木幣		浜益	[山下三五郎]	河野広道
59		4348	有翼酒箸		浜益		河野広道
60		4363	有翼酒箸	1933年	浜益		河野広道
61		4367	有翼酒箸	1933年	浜益	山下三五郎	河野広道
62		4054	箸・串		浜益		河野広道
63		4055	箸・串		浜益	山下三五郎	河野広道
64		4057	箸・串		浜益	山下三五郎	河野広道
65		4058	箸・串		浜益	山下三五郎	河野広道
66		4060	串		浜益	山下三五郎	河野広道
67		4061	串		浜益	山下三五郎	河野広道
68		4062	串		浜益	山下三五郎	河野広道
69		4271	ペーパーナイフ		浜益		河野広道
70		4330	捧酒箸	1932年	浜益	天川恵三郎	河野広道
71	アイヌ民族文化財団	60009	有翼酒箸		浜益村天恵	山下三五郎	児玉作左衛門
72		60011	有翼酒箸		浜益村天恵	山下三五郎	児玉作左衛門
73		61127	花矢		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
74		61128	花矢		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
75		61129	花矢		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
76		61130	花矢		浜益	[山下三五郎]	児玉作左衛門
77		61131	花矢		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
78		61132	花矢 (鐵)		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
79		61133	花矢 (鐵)		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
80		61134	花矢 (鐵)		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
81		61135	花矢 (鐵)		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
82		61136	花矢 (鐵)		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
83		61137	花矢 (鐵)		浜益	山下三五郎	児玉作左衛門
84		61138	花矢 (鐵)				児玉作左衛門
85		61139	花矢 (鐵)				児玉作左衛門
86		61140	花矢 (鐵)				児玉作左衛門
87		61141	花矢 (鐵)				児玉作左衛門
88	早稲田大学會津八一記念博物館	204	捧酒箸				土佐林義雄
89		507	根付				土佐林義雄
90		508	小刀鞘				土佐林義雄
91		523	山刀	[1948年以前]		[山下三五郎]	土佐林義雄
92		525	山刀				土佐林義雄
93	国立民族学博物館	526	山刀	[1948年以前]		[山下三五郎]	土佐林義雄
94		H0016405	かんじき			山下三五郎	

※網掛けは背景情報が明確ではないもの

背景情報に関わる資料本体の記載	備考
「浜益 山下三五郎作 ウサルフチイナウ アバサムカムイのイナウ」の記載	
「浜益」の朱書	
「浜益、天川恵三郎氏に貰ふ 1932年」と記載の紙ラベル貼付	
「2」の鉛筆書、「濱益実田村天川恵三郎氏作 X.1931 H.Kono」のペン書き	
「3」の鉛筆書、「実田村天川恵三郎氏作 六十八才 X.1932 H.Kono」のペン書き	
「1」の鉛筆書	4005、4008のと連番の鉛筆書きがある
「ハママス 山下三五郎作 H-Kono」のペン書	『目録』上は「木幣」
上部に「ウエサシベノカ（アシベノカ）」、下部に「ハママス 山下三五郎作 アベコロイナウ ■はその家の■■■カムイ シソの方にたてる」の鉛筆書	
「1933 濱益アイヌ 山下三五郎作」の鉛筆書	
「ハママスアイヌ」のペン書、「トゥシャンバチトツバ」の鉛筆書	『目録』上は「木幣」
「ハママスアイヌ 山下三五郎作」のペン書、「レシヤマンチトツバ」の鉛筆書	『目録』上は「木幣」
「ハママス 山下三五郎作」のペン書	『目録』上は「木幣」
「ハママス 山下三五郎」のペン書、チトツババシュイアシャンケチトツバ ⁶ の鉛筆書	『目録』上は「木幣」
「ハママス 山下三五郎作」のペン書	『目録』上は「イヌベシュ」
「ハママス 山下三五郎作」のペン書、「イヌベシュ」の鉛筆書	『目録』上は「イヌベシュ」
「ハママス」のペン書	『目録』上は「イヌベシュ」
「浜益」の鉛筆書	『目録』上は「捧酒箸」
「濱益 天川恵三郎氏より貰う 1932年1月」と記載の紙ラベル貼付	
「浜益 山下三五郎」のペン書、「343」の朱書	
「浜益」の鉛筆書、「浜益 山下三五郎」のペン書、「340」の朱書	
矢柄に「山下三五郎3」のペン書	工芸品展出品中
矢柄に「浜益 山下三五郎5」のペン書	工芸品展出品中
矢柄に「2」の鉛筆書、「山下三五郎2」のペン書	
矢柄に「山下三五郎1」の鉛筆書	『目録』では情報が書けているが、本体の記載から追加
矢柄に「4」の鉛筆書	
「10 山下」のペン書	
「8 山下」のペン書	
「7 山下」のペン書	
「6 山下」のペン書	
「9 山下」のペン書	
「11 山下」のペン書	
「12」のペン書	番号及び形状から浜益のものと推定
「13」のペン書	番号及び形状から浜益のものと推定
「14」のペン書き	番号及び形状から浜益のものと推定
「15」のペン書、下端に矢柄接着痕跡あり	番号及び形状から浜益のものと推定
	裏面の刻印が山下のものと共通する。
「山下」の文字を彫刻	
	『北方民芸』13号（土佐林 1948b：6）
	『北方民芸』12号（土佐林 1948a：6）
	船、櫓、スキー、かんじき：北方の移動手段と道具：北海道立北方民族博物館第29回特別展

デに比べて強度が劣ることから、実用を目的としない模型として製作された可能性がある。

(7) 市立函館博物館所蔵資料

早稲田大学會津八一記念博物館所蔵資料(図16:1)に極めて類似した文様が施された資料1点(図16:2)が含まれている。「日高荷負」収集とされることから(市立函館博物館 1976:13)、表には加えず、参考として図示するに留める。早稲田大学所蔵資料とは先端部の形態がやや異なるものの、先端部は明確な再加工痕を留めており、製作された時点では類似した形状だった可能性がある。山下は昭和初期にかけて平取に居住していたことが知られていることから、山下の作品が平取町在住の人物の所有となり、先端部の形状を篋状から沙流川流域でより一般的な鋭い形状に作り替えて使用したという可能性を指摘しておきたい。

3 博物館等所蔵資料の組成

(1) 「収集地」が指し示すもの

対象資料のうち、判明している製作者は山下三五郎と天川恵三郎の2名に限られる。

先に述べたように、山下は浜益に生まれ、平取に住んだのち1930年代には札幌に居住していたことが知られていることから、大部分が1930年代に収集されたと見られる資料に付された「浜益」という情報は、収集当時の居住地ではなく、出身地に遡った情報が記されていることになる。さらに、山下の製作品の中には、平取で聞いた知識をもとに研究者の求めに応じて製作した「日高のチセコロカムイイナウ」等⁽⁹⁾が含まれており(表1:13;図8:10)、それに付された「浜益浜増毛」という背景情報は、他のものと大きく性質が異なると言わなければならない。

一方、天川は1864年に現在の小樽市に生まれ、のち市街化の進展によって高島へ移住させられたものの、1886年に浜益に移住するまでの少なくとも20年以上にわたって小樽・高島周辺に居住していたものと推定される。天川から収集された資料に付された「浜益」という情報は、出身地ではなく資料収集時点での居住地であり、山下に関する背景情報の取り扱いと異なる。

このような背景情報記載方針の不一致は、物質文化の系統的な関係や微妙な地域差を検討する際には無視できないものとなるが、本稿では上記の問題点に注意を払いつつ、統一した基準で背景情報を訂正することはせず、1880年代～1930年代に浜益に居住した経験を持つ人々

の残した物質文化として広く一括して扱うこととする。

(2) 収集された資料の性格

明確な背景情報を伴う資料82点を対象にして、機能に着目した集計を示す。なお、分析にあたっては、対象資料のうち同じ河野広道らの収集資料に由来する北海道博物館所蔵資料と旭川市博物館所蔵資料を纏めて取り扱うこととする。

機能の分類は、儀礼に用いるものの中で臨機的に製作され、使用が1回の儀礼に限られる性質のものを「一回性の祭祀具」、入手・製作されたのち長期間に渡って使用するものを「宝物」、和人との交易や販売を目的として製作するものを「土産物」、研究者の求めに応じて製作されたミニチュアや模型を「模型」とした。

集計の結果を見ると、花矢、有翼酒箸、木幣が該当する「一回性の祭祀具」が全体の85.4%を占め、突出した値を示す一方、墓標模型やかんじきが該当する「模型」は6.1%、捧酒箸が該当する「宝物」は4.8%、山刀やペーパーナイフが該当する「土産物」は3.7%に過ぎない(図17)。漁労具や狩猟具などの生業関連、葬送儀礼に関する品目に至っては、全く含まれていない。

「一回性の祭祀具」が大部分を占めるに至った最大の要因は、主な資料収集者の名取が1930年代以降、「削箸・祖印・祖系・祖元及び主神祈より見たる沙流川筋のアイヌ」(名取 1940)、「千歳アイヌの祖印」(名取 1949)などをまとめ、河野もまた、木幣の刻印や有翼酒箸を分析して「諸系統」を整理する目的をもって「アイヌの一系統サルンクルについて」(河野 1932)、「アイヌのキケウシパシユイ」(河野 1933)、「アイヌのイナウシロシ」(河野 1934)等の研究に取り組んでいたことにあるだろう。名取は後年、研究の目的に関連して、花矢を「アイヌ社会の家系と地域差と地域性を示すシンボル」(名取 1985:11)、有翼酒箸を「男系集団の主要なシンボルの一つ」(名取 1985:218)と見なし、「本来のアイヌ社会では、男系集団と女系集団のシンボルは、(中略)アイヌ社会の動きを規制する重要な機能をもっていた」(名取 1985:218-219)とする考えを述べている。ここから、「本来のアイヌ社会」の男系集団の記述と相互の系統的関係の追及という研究目的にかなうものとして、男性が製作する「一回性の祭祀具」が着目され、集散的に収集されていたことが確認される。祖系との関係を念頭において研究者自身が収集したこの種の民具は、他の品目と比較して入念に背景情報が記録されている傾向があることも、背景情報を伴う資料の中での比率を大きく押し上げる要因として考慮する必要がある。

(9) 図8の8・9の2点も胆振～日高西部地域に類似した特徴を示しており、これらも同様の性格の資料である可能性が考えられる。

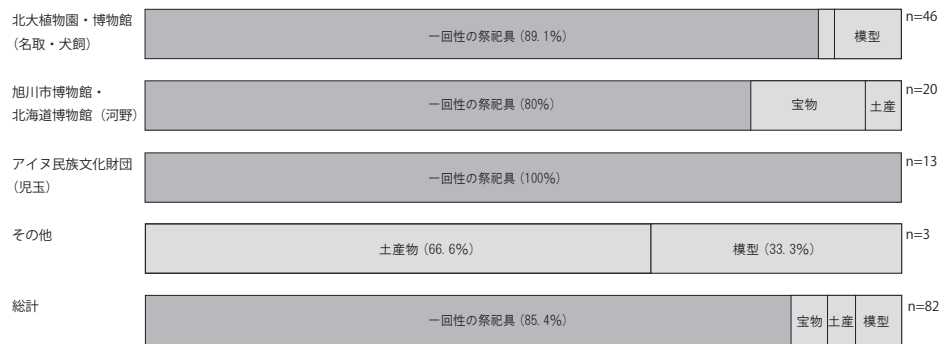


図17 背景情報が明らかな資料の収蔵機関別組成比

とはいえ、上記のようなバイアスがあったとしても、浜益で民具資料が収集される機会が多くあったとすれば、「一回性の祭祀具」が占める割合はここまで高いものにならなかっただろう。「一回性の祭祀具」以外の資料も、「模型」、「土産物」の全て、「宝物」に該当する捧酒箸のうち1点は山下が製作販売したものであり、長期間にわたって地域内で保持されていた可能性があるものは捧酒箸3点に限られている。以上の事実は、札幌に住んだ山下からの買い上げを除けば、浜益での資料収集はかなり低調だったことを示しているとみて良いだろう。資料の大部分が収集されたのとはほぼ同じ頃、名取は北海道内で銚頭の網羅的な収集を試みているが、旧「西蝦夷地」では余市及び忍路で各1点が収集されたのみで、浜益は空白となっていることも注意しておきたい (名取 1972)。

収集が低調だった背景については解釈を絞り込むに十分な資料が得られているわけではないが、本稿1で紹介した金城による記述によれば、浜益では1935年の段階で、外部から訪問した人々が目にする物質文化の多くの部分は和人と同様で、葬送儀礼も仏教によって執り行われるという状況にあった。民具資料を収集しようとする側が着目する「伝統的」なものは、少なくとも集落を訪れた人々が容易に目に出来ないものになっていたとみられる。

一方で、当時は近世末期～明治期の生活経験を有する人物が各地に健在であり、そうした人々にとっては、「一回性の祭祀具」は依頼を受ければすぐに製作可能なものだっただろう。このような状況の中で、男系集団の把握のために網羅的な収集が試みられた品目が、当時札幌に居住して工芸品の製作販売をおこなっていた山下、旭川の給与地問題への関与で広くその名が知られていた天川という研究者が接触可能な二名を通じ多量に収集された結果、組成に強い偏りが生じたものと考えられよう。

4 山下三五郎の工芸品販売活動

杉山による『北の工芸』の記述によって、1933年に札幌の今井呉服店等を会場として開催された「北海道原始文化展覧会」に山下三五郎が関係していたことが知られる (杉山 1934: 119)。展覧会の様子をまとめた『北海道原始文化要覧』に掲載された写真「展覧会記念製品 (4)」には「山下」の刻印がある小刀鞘 (図12: 1) が確認されることから、山下は展覧会の記念品としてこれらの作品を納品、販売していたものと見られる。

2年後の1935年9月24日から29日には、札幌市今井呉服店4階で「アイヌ手工芸品展覧会」が開催された。展覧会は、アイヌ民族の「副業を奨励して経済生活の向上を企画せんとする」(財団法人北海道社会事業協会編 1935: 71) 目的で北海道庁と財団法人北海道社会事業協会が主催したもので、出品者80名余り、出品点数500点に達した (表3) ⁽¹⁰⁾。『北海道社会事業』第42号の記事によれば、このとき山下三五郎は札幌市内在住として8件14点の作品を出品し (表3: 130-135・150・151)、「スモーキングテーブル」で三等賞を受賞している ⁽¹¹⁾。同展覧会の模様は翌年1月に刊行された『北海道舊土人概況』(北海道庁学務部社会課1936) 巻頭にも掲載されており、ここで「三等賞」の貼紙を付して陳列されたテーブル (図18) が、山下の受賞作品とみて間違いなさだろう。

掲載された出品目録からは、山下が小刀や山刀など、近世以来の「蝦夷みやげ」に連なる品目だけでなく、家具類や、1920年代に旭川で本格的な製作が始まって間もない木彫熊 (齋藤 2017) などの現代的な作品も製作していたことが知られ ⁽¹²⁾、創作活動の幅広さを伺い知ることができる。

ただし、こうした創作活動の広がりとは、文献記述によってはじめて知ることができるものであり、本稿で対

(10) 当時の新聞報道では、展覧会開催にあたって優秀な作品は買い上げて天皇に献上するとされており (小樽新聞1935年7月17日)、実際に、最高位の「名誉賞」を受賞した旭川の松井梅太郎が献上品の製作に取り掛かっていることも報じられている (小樽新聞1935年11月16日)。

(11) なお、一等賞は旭川の女性が制作した「アツシ織」、二等賞は川村カネト作「熊彫刻」及び鹿田シムカネ作「チカラベ」である。

(12) 山下が製作したとされる木彫熊が紹介されている事例もある (山里 2014: 116-117)。

表3 アイヌ手工芸品展覧会出品物一覧 (1)

	「品名」	アイヌ語名称から推定される品目	「数量」	「即売予定価格」	「住所」	備考
1	チカラカラベ	刺繍衣	1	8円	静内町	
2	イオアミツプ	刺繍衣	1	10円	静内町	
3	カムイチタルベ	莫産	1	2円	静内町	
4	ニカプウンキナ	莫産	1	10円	静内町	
5	古式ニヨル狩猟用具		1式	4円	静内町	
6	チタルベ	莫産	1	1円50銭	静内町	
7	チニニヌツプ	刺繍衣	1	15円	静内町	
8	手甲		1式	1円	静内町	
9	椀素地編		1	8円	静内町	
10	ハンドバック素地編		1	3円	静内町	
11	弗入兼シューズ		1	7円	静内町	
12	煙草筒編		1	2円	静内町	
13	カロツプ	小物入	4	2円80銭	平取村	
14	アツシ前掛		1	—	舌辛村	
15	タバコ入れ		1	—	舌辛村	
16	ニナワ		1	1円50銭	舌辛村	
17	マキリサヤ		1	1円50銭	舌辛村	
18	糸巻		1	50銭	舌辛村	
19	カモエハシ	捧酒箸	1	1円	舌辛村	
20	大刀 (刀身付)		1	非売品	八雲村	
21	織物器		1	非売品	八雲村	
22	パイプ		2	1円60銭	白老村	出品者は平取出身の貝澤藤蔵
23	お盆		2	4円	白老村	出品者は平取出身の貝澤藤蔵
24	刺繍		2	非売品	八雲村	
25	コタン人形		8	4円10銭	弟子屈村	出品者は更科源蔵
26	盆		1	—	八雲村	
27	小刀ノ鞘 (柄付)		1	—	八雲村	
28	喫煙用パイプ		4	4円	門別村	
29	ツカミコテ	手甲	1	—	舌辛村	
30	ホーシ	脚絆	1	—	舌辛村	
31	ニナワ		1	—	舌辛村	
32	サラリツプ	編袋	1	—	舌辛村	
33	喫煙用パイプ		10	8円	門別村	
34	ステツキ		2	5円	門別村	
35	木彫熊		1	30円	美幌町	
36	木彫熊		1	35円	札幌市	
37	木彫熊		2	6円50銭	札幌市	
38	木彫熊		4	25円	札幌市	
39	木彫大黒		1	非売品	札幌市	
40	熊彫刻三種		4	27円	札幌市	
41	手拭カケ		10	3円50銭	旭川市	
42	衣紋カケ		10	3円50銭	旭川市	
43	箸		50	5円	旭川市	
44	刺繍		1	7円	旭川市	
45	テーブルカケ		1	3円	旭川市	
46	クツシヨン		2	5円50銭	旭川市	
47	ステツキ		1	2円30銭	旭川市	
48	パイプ		2	—	旭川市	
49	チタラベ	莫産	1	参考品	旭川市	
50	刺繍		1	参考品	旭川市	
51	アイヌ草鞋		1	1円	旭川市	
52	煙草入れ及キセル		1	参考品	旭川市	
53	熊彫刻		1	18円	旭川市	
54	アイヌノ家		1	2円	旭川市	
55	人形		—	非売品	旭川市	
56	熊彫刻		2	12円	旭川市	
57	チタラベ	莫産	5	9円20銭	旭川市	
58	熊彫刻		6	28円50銭	旭川市	
59	熊彫刻		3	95円	旭川市	
60	熊彫刻		1	非売品	旭川市	

表3 アイヌ手工芸品展覧会出品物一覧 (2)

	「品名」	アイヌ語名称から推定される品目	「数量」	「即売予定価格」	「住所」	備考
61	アイヌ人形		11	55円50銭	旭川市	
62	舟乗人形		4	21円	旭川市	
63	熊彫刻		7	44円	旭川市	
64	手拭掛		10	3円50銭	旭川市	
65	衣紋掛		10	3円50銭	旭川市	
66	箸		50	5円	旭川市	一括の価格か
67	ヘラ		5	1円25銭	旭川市	
68	杓子		3	1円5銭	旭川市	
69	アツシ	樹皮布ないし樹皮衣	1	17円	旭川市	
70	テーブルカケ		1	5円	旭川市	
71	ハンドバツク		1	非売品	旭川市	
72	キナ	莫産	1	15円	旭川市	
73	アツシ織	樹皮布	1	11円50銭	旭川市	
74	箸		5	50銭	旭川市	
75	フクロ		2	2円40銭	旭川市	
76	チタラベ	莫産	2	70銭	旭川市	
77	彫刻熊		1	13円	旭川市	
78	熊彫刻		2	15円	旭川市	
79	サビタパイプ		3	5円	平取村	
80	サビタパイプ		5	5円	平取村	
81	お盆		1	2円	平取村	
82	マキリ鞘		2	ー	白糠村	
83	煙草盆		1	2円	白糠村	
84	筆立		1	2円50銭	白糠村	
85	小熊		1	60銭	白糠村	
86	熊ノ頭骨イナオ共		1	非売品	幌延村	
87	ビユウチイ「燧」	火打入	1	2円	上士幌村	
88	タシバコ「煙草入れ」		1	25円	上士幌村	
89	アイ「矢」		1	2円50銭	上士幌村	
90	バスイ「御酒鈴」		1	1円	上士幌村	
91	手拭掛		3	1円5銭	旭川市	
92	マキリ		1	2円50銭	旭川市	
93	タシロ	山刀	1	3円50銭	旭川市	
94	箸		1	15銭	旭川市	
95	パイプ		1	50銭	旭川市	
96	熊彫刻		3	12円	旭川市	
97	アツシ織	樹皮布	2	21円50銭	旭川市	
98	熊彫刻		4	37円50銭	旭川市	
99	糸巻		1	10銭	旭川市	
100	熊彫刻		1	2円50銭	旭川市	
101	箸		1	15銭	旭川市	
102	イナウソ	莫産	1	6円50銭	鵒川村	チンウタリ乃光社
103	チタルベ	莫産	1	1円90銭	鵒川村	チンウタリ乃光社
104	チタルベ	莫産	2	3円80銭	鵒川村	チンウタリ乃光社
105	イナウソ	莫産	1	5円	鵒川村	チンウタリ乃光社
106	煙草入れ		1	15円	門別村	
107	シトキ(玉)	首飾	2	非売品	鵒川村	
108	ミンカリ(耳輪)		3組	非売品	鵒川村	
109	アイ(矢)		1	非売品	鵒川村	
110	カラシントコ(発火器)		1	非売品	鵒川村	
111	ニトムトム(ホクチトスル炭ノ材料)		2	非売品	鵒川村	
112	ホチブイヨマツブ(小守具)		2	非売品	鵒川村	
113	ムツクル(案器)		1	非売品	鵒川村	
114	イレクテブ(鹿ノ呼子)		1	非売品	鵒川村	
115	タバコオブ ニキセリ(煙草入れ 木ノキセル)		各1	非売品	鵒川村	
116	キナ(敷物材料草)		3種	非売品	鵒川村	
117	カエカニ(アミ糸編器)		1組	非売品	鵒川村	
118	イナウソ	莫産	2	12円	鵒川村	出品者は男性であり、製作者は別の人物と推定される
119	サラネブ	編袋	1	1円50銭	鵒川村	出品者は男性であり、製作者は別の人物と推定される
120	タラ(荷負縄)		1	1円30銭	鵒川村	出品者は男性であり、製作者は別の人物と推定される

表3 アイヌ手工芸品展覧会出品物一覧 (3)

	「品名」	アイヌ語名称から推定される品目	「数量」	「即売予定価格」	「住所」	備考
121	チカルカルベ (着物)		1	20円	鶴川村	出品者は男性であり、製作者は別の人物と推定される
122	カバラアミツプ (礼服)		1	15円	鶴川村	出品者は男性であり、製作者は別の人物と推定される
123	メノコサバムエツプ (女ノ頭巻)		1	8円	鶴川村	出品者は男性であり、製作者は別の人物と推定される
124	手提袋		1	8円20銭	鶴川村	出品者は男性であり、製作者は別の人物と推定される
125	テユキ イクバスイ (酒器ト神箸)		各4組	45円	鶴川村	
126	タツタンイムシ (タツタン刀)		2	3円80銭	鶴川村	
127	柱掛		3	7円	旭川市	
128	熊彫刻		1	10円	旭川市	
129	熊とアイヌ		1	3円	白老村	出品者は瀬棚出身の住吉平吉
130	木彫熊		1	10円	札幌市	出品者は浜益出身の山下三五郎
131	アイヌ犬		1	3円50銭	札幌市	出品者は浜益出身の山下三五郎
132	山刀		2	15円	札幌市	出品者は浜益出身の山下三五郎
133	メノコネマ	盆	2	18円	札幌市	出品者は浜益出身の山下三五郎
134	テーブルセット		1	65円	札幌市	出品者は浜益出身の山下三五郎
135	茶テーブル スモーキングテーブル		4	43円	札幌市	出品者は浜益出身の山下三五郎
136	座布団		1	6円50銭	旭川市	
137	テーブル掛			2円50銭	旭川市	
138	フクサ		1	2円30銭	旭川市	
139	手拭掛		3	1円5銭	旭川市	
140	敷物		3	一	旭川市	
141	カアロツプ	小物入	2	80銭	旭川市	
142	熊彫刻		2	6円50銭	旭川市	
143	熊彫刻		1	7円	旭川市	
144	熊彫刻		2	5円	旭川市	
145	熊		2	5円	旭川市	
146	柱掛		2	50銭	旭川市	
147	熊		1	8円50銭	旭川市	
148	アツシ	樹皮布ないし樹皮衣	1	7円	旭川市	
149	柱掛		1	50銭	旭川市	
150	小刀		2	5円	札幌市	出品者は浜益出身の山下三五郎
151	ネマ	盆	1	8円	札幌市	出品者は浜益出身の山下三五郎
152	タバコ入れ		6	8円50銭	色丹村	
153	木鼠彫刻		1	非売品	厚岸郡	
154	ステツキ		1	非売品	厚岸郡	
155	蝦ノ彫刻		1	非売品	厚岸郡	
156	アツシ帯	帯	5	10円	平取村	
157	カアロツプ	小物入	15	10円	平取村	
158	イナウソ	莫産	2	10円	平取村	
159	カアロツプ	小物入	26	18円20銭	平取村	
160	アツシ	樹皮布ないし樹皮衣	2	14円	平取村	
161	イナウソ	莫産	1	5円	平取村	
162	カアロツプ	小物入	22	15円	平取村	
163	チタルベ	莫産	7	3円	平取村	
164	アツシチカルカルベ	刺繍衣	1	12円	平取村	
165	カアロツプ	小物入	13	9円10銭	平取村	
166	アツシ	樹皮布ないし樹皮衣	1	7円	平取村	
167	カアロツプ	小物入	15	10円50銭	平取村	
168	チタルベ	莫産	3	1円50銭	平取村	
169	イナウソ	莫産	3	15円	平取村	
170	カアロツプ	小物入	4	2円80銭	平取村	
171	アツシ	樹皮布ないし樹皮衣	1	7円	平取村	
172	チタルベ	莫産	2	1円	平取村	
173	イナウソ	莫産	1	5円	平取村	



図18 アイヌ手工芸品展覧会（1935年）受賞作品

象とした博物館等収蔵資料の組成との間には大きな乖離が存在している。この乖離は、河野や名取の関心が本質主義的に想定された「本来のアイヌ社会」（名取1985：218）における男系集団とその系統的関係のみに向けられており、その視野からはアイヌ民族の生活のうち和人文化と共通するようになっていた部分のみならず、新たに創造された工芸作品もまた抜け落ちていたということを強く示唆している。

おわりに

本稿では、アイヌ民族の「民具」資料として博物館等に収集される資料の中から、浜益という特定地域に着目して分析を加えた。得られた結論をまとめると、次のようになる。

- 1) 浜益地域収集という情報が確認できた資料82点のうち73点（89.0%）を、昭和初期に札幌に在住した工芸家、山下三五郎の作品が占める。
- 2) 浜益地域収集資料82点のうち、70点（85.4%）を「一回性の祭祀具」が占める。
- 3) 「一回性の祭祀具」の比率の高さは、主な資料収集者である名取武光、河野広道らの研究上の関心が強

く作用すると同時に、その他の契機で収集される民具資料が少なかったことを反映したものと考えられる。

- 4) 文献資料からは、山下三五郎が木彫熊や家具など多様な「現代的」作品群を製作・販売していたことが確認された。こうした活動と博物館等収蔵資料の組成にズレが生じた背景には、1930年代当時、「現代的」な作品もまた、研究者の関心の外に置かれていたことが影響しているものと考えられる。

以上のように、「浜益」という背景情報を伴うアイヌ民具資料の組成には、1930年代当時の資料収集者の関心が、アイヌ民族の生活を支える物質文化総体ではなく、いわゆる「サルベージ人類学」の立場から見た「伝統文化」に向けられていたことが強く作用しており、収蔵資料を通じて当時の浜益に暮らしたアイヌ民族の生活を具体的に伺い知することは困難と言わざるを得ない。むしろ、研究者が強い目的意識を持って網羅的な収集を試み、しかも新規に製作可能だった品目を除けば、ほとんど資料が収集されなかったことが顕著な特徴をなしていると言えるほどである。

とはいえ、これは収蔵された資料が全くの「作られた」姿であることを意味するものではない。研究者が求める「伝統文化」を記憶する一人の工芸家が、その再現を生業の一部として選択した結果として残されたものであるという事実もまた看過するわけにはいかない。文献記録との対比からは、山下が自身の保持する技術の中で、ある場面では研究者の求めに応じて「伝統的」な儀礼具を製作して納品し、またある時には「現代的」な作品を出品するような、工芸家としての多面性を備えていたことも確認された。そこには、どのような相手から何が求められているのかに対する、一人の生活者としての冷静な判断までも見て取ることができるだろう。

組成論的検討には資料の性質に由来する限界があることは強く意識しておかなければならないが、限界のみを言って検討を止めるのは本末転倒であり、基礎的な事実の確定を進めつつ、個々の資料群が収集された背景について考察を深めていく必要がある。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、石黒隆一、小川正人、亀丸由紀子、北原次郎太、山崎幸治、山田伸一の諸氏よりご教示を賜ったほか、資料の調査にあたって、飯岡郁穂（旭川市博物館）、宇野博徳（石狩市浜益生涯学習課）、加藤克（北海道大学植物園・博物館）、齋藤玲子（国立民族学博物館）、ナワビ矢麻（早稲田大学會津八一記念博物館）の諸氏から多大なご協力を賜りました。末筆な

から記して感謝申し上げます。ただし、存在する全ての誤りの責は筆者に帰する。

本研究はJSPS科研費JP18K12558「考古学的分析手法を導入した博物館収蔵アイヌ民具資料の基礎的研究」(研究代表者:大坂拓)、及びサントリー文化財団研究助成「北海道日本海沿岸地域のアイヌ民族が経験した19世紀-文献・モノ・絵画から近世・近代移行期のアイヌ社会を探る-」(研究代表者:小川正人)による成果の一部である。

引用文献

- アイヌ文化保存対策協議会編 1969, アイヌ民族誌, 第一法規出版株式会社.
- アイヌ民族博物館編 1991, アイヌ民族博物館児玉資料目録Ⅱ, 旭川市史編纂委員会 1959, 旭川市史 第一巻.
- 旭川市博物館編 2006, 旭川市博物館所蔵品目録XVI-民族資料／儀礼関係:捧酒箸.
- 旭川市博物館編 2008, 旭川市博物館所蔵品目録XVIII-民族資料／儀礼関係:木幣類2・送り場資料.
- 荒井源次郎 1984, アイヌの叫び, 北海道出版企画センター.
- 上村六郎 1943, 民族と染色文化, 靖文社.
- 大蔵省 1885, 開拓使事業報告第一編.
- 大坂 拓 2016, 北海道アイヌの儀礼用冠についてー北海道大学植物園・博物館所蔵資料の検討ー, 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 1: 23-42.
- 太田雄治 1933, アイヌのパラシュート, 民俗学 5:27-28.
- 小川正人 1997, 近代アイヌ教育制度史研究, 北海道大学出版会.
- 小川正人・山田伸一編 1998, アイヌ民族近代の記録, 草風館.
- 沖野慎二 2001, 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(下), 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 7: 1-20.
- 貝澤 正 1979, 歴史をたずねて 天川恵三郎翁のこと, 社団法人北海道ウタリ協会編, 先駆者の集い 20:7-9.
- 加藤 克 2004, 札幌農学校所属博物館のアイヌ民族資料, 北大植物園研究紀要 4: 1-54.
- 加藤 克 2008, 北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について: 歴史的背景を中心に, 北大植物園研究紀要 8: 35-91.
- 加藤 克・高谷文仁 2018, HUNHM 所蔵墓標資料の収集情報の混乱について, 札幌博物館研究会誌: 1-10.
- 金田一京助・杉山寿栄男 1941, アイヌ芸術 第一巻服装編, (復刻版1973北海道出版企画センター).
- 久保寺逸彦 1956, アイヌ文学序説, 東京学芸大学研究報告7, 1-55, (2004, アイヌ民族の文学と生活, に再録).
- 小杉 康 1997, 物質文化からの民族文化誌的再構成の試みークリールアイヌを例としてー, 国立民族学博物館研究報告 21: 391-502.
- 小谷凱宣・佐々木利和・切替英雄・出利葉浩司・池田透・ハンス・ディータ・オイルシュレーガー 1993, アメリカ合衆国東部と中西部の主要アイヌコレクション, 在米アイヌ関係資料の民族学的研究, 文部省科学研究費補助金(1990~1992年度)国際学術研究(学術調査)研究成果報告書, 名古屋大学教養部.
- 小谷凱宣 2004, 海外アイヌ文化財調査: 目的と経過, 収集の歴史, 調査研究の成果, 海外のアイヌ文化財: 現状と歴史: 6-20.
- 古原敏弘 2001, 金城朝永日記(抄), 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 7: 189-224.
- 河野常吉他編 1987, 北海道殖民状況報文 石狩国, 北海道出版企画センター.
- 河野広道 1931, 墓標の型式より見たるアイヌの諸系統, 蝦夷往来 4: 101-121.
- 河野広道 1932, アイヌの一系統サルンクルに就て, 人類学雑誌 47(4): 137-148.
- 河野広道 1933, アイヌのキケウシバシユイ(Ⅰ)アイヌのイナウの研究Ⅰ, 人類学雑誌 48(7): 365-375.
- 河野広道 1934, アイヌのイナウシロシ(Ⅰ)イナウの研究Ⅱ, 人類学雑誌 49(1): 12-22.
- 河野広道 1936, アイヌとトーテム的遺風: 特にレブンカムイシロシとキムンカムイシロシに就て, 民俗学研究 2(1): 45-53.
- 河野広道編 1933, 北海道原始文化要覧.
- 財団法人北海道社会事業協会1935, 北海道社会事業 42.
- 齋藤玲子1994, 北方民族文化研究における観光人類学的視点(Ⅰ)ー江戸〜大正期におけるアイヌの場合ー, 北海道立北方民族博物館研究紀要 3: 139-160.
- 齋藤玲子1996, 現代社会におけるアイヌ工芸の在り方ー観光をととした研究に向けてー, 北海道立北方民族博物館研究紀要 5: 103-104.
- 齋藤玲子 2017, 藤戸竹喜と木彫り熊とアイヌ文化ー旭川から阿寒湖, そして世界へ, 木彫家藤戸竹喜の世界: 216-221.
- 市立旭川郷土博物館 1975, 市立旭川郷土博物館所蔵品目録Ⅳ.
- 市立旭川郷土博物館 1978, 市立旭川郷土博物館所蔵品目録Ⅵ.
- 市立函館博物館 1976, 北海道アイヌのひげべら 国指定重要民族文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書 2.
- 市立函館博物館 1979a, アイヌの狩猟用具そのほか 国指定重要民族文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書 5.
- 市立函館博物館 1979b, 市立函館博物館蔵品目録-1民族資料篇.
- 杉山壽榮男 1934, 北の工芸, 河出書房.
- 杉山壽榮男 1938, 北海道石狩国浜益郡岡島洞窟遺跡, 人類学雑誌 53(7): 34-45.
- 杉山壽榮男 1940, アイヌの編物, 人類学雑誌 55(2): 63-79.
- 杉山壽榮男 1942, 日本原始繊維工芸史 土俗篇.
- 高倉新一郎 1935, 能登西雄談話聞書, 北海道社会事業37:1-18.
- 高倉新一郎 1972, 新版アイヌ政策史, 三一書房.
- 谷本晃久 2006, 第六章 近文アイヌと「旧土人保護地」移転問題, 旭川市史, 3:705-866.
- 出利葉浩司 1997, 20世紀前半におけるアイヌ社会の変容についての一試論ー日米アイヌコレクションの比較をととしてー, 欧米アイヌ・コレクションの比較研究 平成6~8年度文部科学省科学研究費補助(国際学術研究・国際学術調査)研究成果報告書, 名古屋大学大学院人間情報学研究科.
- 土佐林義雄 1948a, 北の民藝 4, 北方民藝 12: 5-7.
- 土佐林義雄 1948b, 北の民藝 5, 北方民藝 13: 5-6a.
- 名取武光 1934, アイヌ土俗品解説, ドルメン 3(4): 13-25, (1972, 名取武光著作集Ⅰアイヌと考古学(一), に再録).
- 名取武光 1939, アイヌの矢毒「アイコルチェップ」, ドルメン 5(6), 6-7, (1972, 名取武光著作集Ⅰアイヌと考古学(一), に再録).
- 名取武光 1940, 削箸・祖印・祖系・祖先及び主神祈より見たる沙流川筋のアイヌ, 人類学雑誌 55(5), 203-229, (1974, 名取武光著作集Ⅱ アイヌと考古学(二)に再録).
- 名取武光 1941, 沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ, 北方文化研究報告 4: 35-112, (1974, 名取武光著作集

II アイヌと考古学(二)に再録)

- 名取武光 1949. 千歳アイヌの祖印, 民族学研究 13(4), 377-381. (1974, 名取武光著作集II アイヌと考古学(二)に再録)
- 名取武光 1972. アイヌの原始狩猟具〈ハナレ〉と其の地方相(補遺). 名取武光著作集I アイヌと考古学(一), 180-201
- 名取武光 1985. アイヌの花矢と有翼酒箸, 六興出版.
- 山里 稔 2014. 北海道木彫り熊の考察, かりん舎.
- 山田伸一 2011. 近代北海道とアイヌ民族ー狩猟規制と土地問題, 北海道大学出版会.
- 北海道開拓記念館 1981. 民族 I 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1.
- 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園編 2008.

北大植物園資料目録 6 アイヌ民族資料.

北海道庁学務部社会課 1936. 北海道旧土人概況.

図版出典

図1、図17:筆者作成

図2・3・5・6・7・8・図9:1〜4、6〜9、図10:1〜7、図11:北大植物園・博物館提供

図4:北大植物園・博物館提供写真に筆者加筆

図9:5、10、図10:8、図12、図14、図16:所蔵機関の許可を得て筆者撮影

図13、図15:河野広道編1933より作成

図18:北海道庁学務部社会課1936より作成

ARTICLE

A Basic Study regarding Ainu Materials of the Hamamasu Region: Research Trends in the 1930s and the Activities of Artisan Sangoro Yamashita

OSAKA Taku

The aim of this study is to organize Ainu Materials collected from Hamamasu, and ascertain the particular characteristics of these collected inventories with attention to functional aspects. Analysis has produced the following findings:

- 1) Of the 82 items with information confirming their point of collection as the Hamamasu region, 73 items (89.0%) were produced by Sangoro Yamashita, an artisan who resided in Sapporo during the early Showa period.
- 2) Of the 82 items collected in the Hamamasu region, 70 (85.4%) are single-use religious ritual articles.
- 3) The high proportion of "single-use religious ritual articles" is thought to be influenced by both the strong research interests of the primary material acquirers, who include Takemitsu Natori and Hiromichi Kono, as well as the scarcity of folkcraft articles collected through other initiatives.
- 4) Documentary records have confirmed that Sangoro Yamashita produced and sold a large variety of "modern" groups of works, such as carved wooden bears and household articles. The discrepancy between these activities and the composition of collections at facilities such as museums is thought to be influenced by researchers in the 1930s having been more focused upon areas other than "modern" works.